

[翻 訳]

『スペクテイター』(11)

——第96号から第105号——

門 田 俊 夫

第96号 1711年6月20日(水曜日)

【スティール】

忠実で実直な召使。(ホラティウス)¹⁾

拝啓

召使に関する貴方の論説を幾度となく読ませて戴きましたが、²⁾ 私自身召使の身ですが、ひどい召使のことばかりがやり玉に挙がり、善良な召使については触れられていませんので気を悪くしているところです。とはいえ、貴方が、どんな身分の人にでも機知と良識を備えた人がいるということ、そしてまた、召使というものは主人にとって都合のいい点も悪い点も口にするのだとおっしゃっている点については、私もその通りだと考えます。私のお粗末な体験に照らしてみましても、召使にも分別をわきまえた人物がいると思います。貴方は私たち召使がしばしばよこしまな行為に走る原因として、食事宿泊手当の支給と暮らし方をあげておられます。私としましては、45歳となったこれまでの生活、つまり、14歳で給仕として働き始め、貴族のポーターとしての現在の地位に就くまでの私の生活をご紹介しますことで、この件についての私の考えにかえたいと考えます。

私の父親はサー・スティーヴン・ラックレント家の貧しい小作人でした。サー・スティーヴンは私が9歳になると、学校に行かせるというかハリー坊ちゃんのお供として私を学校に行かせてくれました。そして、サー・スティーヴンが私の学費は払ってくれましたが、学校での私の扱いは召使同然でした。先生は私にはほとんど心配りをしてくれませんでしたので、独力で勉強せざるを得ませんでした。坊ちゃんはとても元気の良い少年で、終始行動を共にしていた私は、坊ちゃんのことを気に入っていましたが、いろいろと好結果をもたらしてくれました。坊ちゃんも私のことをとても気に入ってくれました。坊ちゃんは私となれなれしくしているという理由からしばしば鞭打たれました。坊ちゃんは、いつも、自分が財産を相続することになったら、私に私の父親が借りている土地をただで貸してあげると言っていました。私はウェストミンスター校に入

1) ホラティウス『諷刺』2.7.2-3.

2) 第88号参照。

る坊ちゃんについて上京しました。この頃には、坊ちゃんは、夜になると、学んだことをすべて私に教えてくれました。そして、坊ちゃんが勉強するときに辞書を引く役目は私の仕事でした。坊ちゃんがひどい熱病に罹り、発病して10日で亡くなったのは神様の摂理でした。これは私が経験した初めての悲しい出来事でした。事実、私は病気に罹っていたときの坊ちゃんの立派な振舞いをまるで昨日の出来事のように鮮明に思い出します。坊ちゃんが何か欲しがったら、それを渡すのはトムでなくてはなりませんでした。私が少しでもつらそうにすると、坊ちゃんは、可哀相なトムを困らせてはいけない、水薬をもっと欲しい、他の人では嫌だ、と叫ぶのでした。坊ちゃんは、自分の容態を気遣って耐えられなくなっている私を見ると、さほどたいしたことがないといった素振りを見せて、「トム、トム、元気を出すのだ」と言って私を慰めてくれました。私が薬を飲ませている最中に、坊ちゃんはひきつけを起こしました。そして、その時、坊ちゃんはうめき声を発してそのまま息が絶えました。私は素早く部屋から追い出されました。私は壁に頭をぶつけ、いつまでもさめざめと泣き崩れました。私の悲しみは言うに言われぬものでした。みんなは私が死ぬのではないかと考えました。二、三日すると、世間によくある普通の奥様ですが、その奥様が、私を見ていと息子のことを思い出すからという理由で、私を屋敷から追いだそうとしました。サー・スティーヴンは徒弟に出すことを提案しましたが、やりくり上手の奥様は、夫が慈善行為に金を費やすことを認めませんでした。奥様が自分の息子があれほど気に入っていた者を冷たく見捨てるのを知って、私はこの上ない憤りを覚え、どこに行くあてもなく屋敷を飛び出しました。

サー・スティーヴンの屋敷を出て三日目、私はテンプル法学院の歩道を行ったり来たりしていました。(後になって主人から聞いたのですが) 身なりは良いが餓死寸前の私を見掛けた法学院のある若い紳士が、私のことを労せずして手に入る供回りと考え、ごく簡単に「主人につく気はないかね」と尋ね、自分に付いて来るようにと言ったのです。私は言われるままその方に付いて行きました。直ぐに、私は自分のことをこの上なく幸運な人物だと思いました。私の仕事といえば、娼婦への言付けや、主人の知り合いの若いご婦人への伝言の使い走りをする程度でした。主人のお供をして、私はあちこちの居酒屋や劇場やマルベリー・ガーデン³⁾やその他ありとあらゆる盛り場をうろつきました。主人は夜毎新たな色事に身をやつしました。お金が続く限り、主人の時間は色事とお酒に費やされました。こういった放縦な生活の間、私は夜半まで居酒屋の階段に腰を掛け、召使同士でサイコロなどをして遊んで過ごしました。主人のお金がなくなると、たいてい私には恋歌とか昔の歌や新しい諷刺文の口述筆記の仕事が割り振られました。この生活は主人が結婚するまで続きました。私が主人の不義密通に通じていたために、主人は結婚するときには抜

3) セント・ジェイムズ公園の北西にあたり、現在バッキンガム宮殿が建っている辺り。日記作家イーヴリンは「上流階級の人たちの息抜きの場所」と述べている(1654年5月10日)。マルベリー・ガーデンは劇作品にも登場し、セドレーは文字通り『マルベリー・ガーデン』(1688年)という戯曲を書き、シャドウエルも『ユーモリスト』で触れている。

け目なく私をお払い箱にした訳です。

私はつぎにどうしたらよいかすっかり途方に暮れました。そこで、この主人の愛人のひとりであり、私同様に主人の結婚によって被害を受けたある娼婦に身を委ねました。その時はたまたままとまったお金を持っていた彼女は、私の頭の方から足の先まで身繕いをさせてみて、私が粹な男だと分かったので、雇ってくれました。時々、私は彼女のお供で外出しました。そして彼女は偶然自分好みの若者に会おうと、私はあてに出来ないといって私のことを見捨てるのでした。新取引所⁴⁾では、彼女はしばしば商品の値引き交渉をしました。そして、誘惑に駆られたいと思う場合には、私を使いにやりました。控え目な召使と彼女が交渉を始めると、私は直ちに引き返し、彼女にサー・ジョンがご帰還になられますと伝えました。つきまとわれるのを嫌った彼女は、別の馬車を用意させました。愛人は私に馬車の後をつけるように合図を送りますが、私はそんなことは不可能だと首を振ります。私はつぎの角で主人と別れ、相棒がどうするか後をつけます。私はこの手の役目を忠実にこなすほかに、主人に代わって恋文を作成しました。某所で某色のコートに羽織った某紳士を見掛けた婦人の手紙とか、嫉妬深い老夫を恐れている婦人の手紙とか、財産問題は決着がついているが両親があまりにも厳格なために弟としか思えないような人と駆け落ちしたくなったのだ、といった手紙などをしたためた訳です。要するに、教育も中途半端しか受けていなく、またくだらない書物を愛読した私は、彼女に言い寄るどんな手紙よりも立派な手紙を書くことが出来たのです。彼女は非常に頭の良い人でしたので、巧妙にしとやかさを装って人前で上手く立ち回りました。こういった生活を送っている最中に、私は突然、10ポンド紙幣が入った彼女の手紙を受け取るようになりました。「律義なトムへ。あなたとはもうお別れしましょう。私は田舎に広大な家屋敷を持った非常に素敵な紳士と結婚することにしました。いつまでもあなたを私の元に置いておくと、彼が邪推するいけませんから。それではご機嫌よう。」

この仕事もまた結婚のせいでふいになったとき、今後は全く別種の人たちを対象にすることにしました。そこで、四頭立て馬車があり、召使を四、五名抱え、地所はさほでもないがさっぱりした屋敷と全体的に素敵な外観のある家に執事として入り込みました。ここではしばらくの間とても快適な暮らしが続きましたが、ある日運悪く、当代一の謹厳実直な主人がお手伝いと屋根裏部屋にいるのを目撃してしまったのです。私は世間のことを知り過ぎていましたので、屋敷にそのまま留まることは考えられませんでした。そこで、翌日、田舎から父の危篤を報せる手紙が来たことを口実にして、見て見ぬふりをしたことに対する報奨金を貰って私は執事の職を辞しました。

つぎに仕えたのは気難しい独身男性でした。彼の元には1年半いました。その間は終始、非常

4) ニュー・エクスチェンジはストランドの南にあって、現在のベッドフォード・ストリートの向かいグラム・ヤード近くにあったマーケット。王立取引所と同じような商品が販売されていた。ハットンによると、婦人用帽子屋や絹織物商などおよそ150店舗あったということである。1737年には取り壊され、民家となった。

に気楽に過ごしました。なぜなら、主人のことが分かり始めると、彼が口することだけに気を配ればよかったからです。その結果、彼は、ある日上機嫌で「君は私に敬意を払わないので、これまでの召使の中で最も忠実な召使だ」と言うのでした。

以上がこれまでの私の人生における主要な出来事です。私の経験したその他種々の仕事については長々と書くつもりはありません。私がどうしてもなく場違いに思えるものもありましたし、召使には無縁な世界もありましたし、召使のことではこの上なく不運な人たちもいました。ここで私が申し上げたいのは、(貴方のお話はあまりにも概括なさり過ぎていますが) 私たち哀れな召使はすべてがすべてならず者ではないということなのです。つまり、私たち召使は主人をお手本にして現在の私たちがあるのだということをお分かり戴きたい訳です。現在私がお世話になってます屋敷では、私が唯一うしろめたく思っている点は嘘をつくということなのです。毎日、私はガウンを羽織り手に棒を持ち真顔で嘘をついています。そして、ほぼ一日中、主人に面会を求める無礼な懇願者を排除したり、奥様に会いに来る嫌な訪問客を追い払ったりしています。ところで、噂では私が召使たちの顔役になっているのだということをお知らせしておきます。⁵⁾ オペラで天井桟敷の手すりに棍棒を打ち付けているのも、悲劇の重要なシーンで上流人士たちが互いに目を合わせているときに、きちんと感動しているのも、誰だろう私なのです。観客の中から、適切な所で、つまり、台詞に感動したときにはフーンとか民の声の場面でフレーという声が聞こえたら、私がそこにいるとお考え下さっても構わないと思います。

敬具

トマス・トラスティー

第97号 1711年6月21日(木曜日)

【スティーラー】

惜しみなく魂を投げ捨てる。(ウェルギリウス)¹⁾

未整理の新聞の中に、これまで何度となく取り上げましたファラモンとユークラットが決闘について交わした話と話し合いの結果発布された布告の写しがあります。²⁾

ユークラットの主張では、昔から世の中に浸透しており、確実に崇高で見上げた行為として根づいている反道徳的行為を絶滅させるためには、違反者を獄につなぎ厳しい責め苦を与えて死にいたらせるといった厳格な懲罰しか手だてはないということでした。ところが、ファラモン王は、こういった悪弊をなくすためには確かに恥辱を与えることが必要だが、この悪弊が浸透しているのは体面ということに対して細やかな感情を示す人たちに限られていること、および、決闘とい

5) エイトケンによると、天井桟敷に陣取る召使たちがうるさくて、舞台上の台詞が聞こえないほどだったため、主人は仕方なくむちで黙らせたということである(1709年12月9日『婦人向けタトラ』)。

1) ウェルギリウス『アイネーイス』6.436。

2) 第84号参照。

うものはしばしば両者が胸中では互いに友好関係にあり和解を願っているのに、体面を繕うために行なわれるのだという点を考慮すると、これに終止符を打つには、別の方法に目を向けさせるのが効果的なのは明白だと応じました。こういった人物には、貧困と恥辱が十分な責め苦となる、自分としては、自分をもっと早く不快感を表明しておけば防げたかも知れないことにうしろめたさを覚えており、これ以上罰する積りはないと王は返事をしたのです。さらに、王は、自分は罪人というよりも人間性それ自体を貶める拷問には原則的に反対である、また、反道徳的行為が恥辱を恐れるといった見上げた大義から生じる悪影響に過ぎない場合には、拷問という方法は用いたくないと言いました。同時に、王は、慈愛を込めて慈悲について語り、その行為自体には高尚な所があるが具体的にはひどい結果を招くことが多々あることを悔やみました。罪人に慈悲をかけることは一般大衆にとっては無慈悲となる³⁾との考えを王は口にしました。王は殺人者の命を奪っても死者を蘇らせることはできないが、王はまた殺人者の償いをすることもできないのだと語ります。つまり、王は不公平にならないように犯罪者は後先なく共に容赦しないと語るのですでした。「私はフランスを征服した。しかもなお、私は国民に法を示した。法は私の生きる手段であり、それによって私の権力は縮小することではなく、方向づけが与えられるのだ。私はいまでも勇敢で高潔な人をたたえるために、無知な人物と徳高い人物とを見分けることには自信がある。私の施す善意には限りがなく、私の寛大さには誰も異議を差し挟んだり、指図したりすることはできない。善に報い、悪を懲らしめるのは私の意のままだ。引き続きファラモンは、従って、自らの責任で不幸になった人物と運悪く不幸になった人物に変わらぬ思いやりを示さなくても、この悪弊はうまく断ち切れるだろう、と語りました。(王は笑いながらつぎのように語って話を締めくくりました) こびへつらう連中は口やかましく王は神の代理人だと言う。そうありがたいものだ。悪事をはたらくことだけは避けたいものだ。」

ファラモンとユークラットがある夜こういった話をしてほどなく、つぎの布告が出されました。

決闘を禁ずるファラモンの布告⁴⁾

ガリアの王ファラモンは親愛なる臣民にこれを発布する

最近、我が王国の貴顕諸士の間で、神および人の法をすべてないがしろにして、事の大小にかかわらず様々な挑発にのって相手を決闘場に呼び出し、自らの手でそして自らの威信を掛けて闘いによって争いの決着をつけるのが習わしとなっているとの情報が余の耳に入ってきたがゆえに、余はこの習わしに検討を加えることが適切だと判断した。そしてこういった運命を決する決意をするに至る通常の原因を調べてみた結果、この邪悪な習わしのせいで、宗教上の戒律や思慮分別という物差しがあるにもかかわらず、過ちを許すという人間の最も崇高な行為が貶められていること、そして愉快的交友と有徳の交わりのルールが捻じ曲げられていること、みだらで独善的で

3) シャルダン『ペルシア旅行記』(1711年アムステルダム) に出てくるペルシアの格言。

4) ルイ14世の布告については第99号参照。

恥知らずな連中が、慎重で慎み深く謙虚な人たちを侮辱するという事、そして最後に単に命を賭けることができるかという一つの行為によって、あらゆる美德が抑制され、あらゆる悪徳が奨励されているのだということが判明した。さらにまた、非常に遺憾なことであるが、このひどい行為は、長らく処罰されなかったことで、(余の関心はもっと普遍的なことに向いているのだが) 誉れあるものになっており、拒絶することは不名誉なことになっているのだということが判明した。そして種々検討していく過程で、真の誉れに対する強い情熱を備えた非常に卓越した人物とか非常に将来を嘱望された能力を備えた人物こそ、ともすればこの放縦から生じる危険に巻き込まれやすいのだということが判明した。さて、以上の事柄を真剣に考慮し、(自制心がなくなり、あまりにも突発的で激しているために侮辱の言辞にまで至らない) こういった緊急事態はすべてこれまでの法で規定されているということ、そしてまた、忘恩といったさほど侮辱的でないものは微妙で繊細なために一般的な原則では捉えにくいという点を考慮した結果、つぎの通り余の決意を布告することによって、我が臣民からこの慣習、つまり、節度を越えた怒りを一掃することにする。

この布告が公布された後は、果し状を出す者もまた果し状を受諾する者も、また、その双方の子孫も、かりに死が伴わなくても、我が王国では今後一切の官職には就かせないこととする。

果し状を出したこともまた果し状を受諾したことを立証する人物に、その双方の全動産を与える。また、双方の不動産は、当該違反者が実際に死亡したときと同様に、それぞれの相続人のものとする。

(すでに臣民に授与している) 法律によって殺人罪の訴えが認められ、その訴えによって犯罪者に有罪判決が下った場合には、その犯罪者には死が与えられるだけでなく、動産、不動産を含めてその他諸々の財産はすべて、死刑になった時点で、彼が殺めた人物の相続人に授与するものとする。

今後は、余の治世および余の後継者の治世になっても、この罪を容赦することはなく、違反者の財産、名誉、家門は永遠に回復されることはない。

ファラモン王治世第2年目、420年2月8日、プロアの宮廷にてこれを宣す。

第98号 1711年6月22日(金曜日)

【アディソン】

非常に熱心に身を飾り立てる。(ユヴェナリス)¹⁾

婦人のヘアスタイルほど変化しやすいものはありません。²⁾ 私が覚えているだけでも、角度が30

1) ユヴェナリス『諷刺』6.501.

2) 18世紀初頭の婦人たちの髪型でコモード(フランス語ではフォンタンジュ)のこと。針金やレースの帽子や重ねリボンを駆使して異常な高さにまでする髪型。イギリスではこの髪型はウィリアム、

度以上上下しています。10年ほど前には、非常に高く盛り上げられており、女性の方が男性より随分背丈があるように見えました。女性がとても巨大でしたので、女性を前にすると私たち男性はまるでいなかのようでした。³⁾ 現在では、女性は同じ人種とは思えないほどに小さく縮んでいます。かつてはゆうに7フィートあったが、今では5フィート数インチの婦人を何名か知っています。彼女たちがなぜこんな風に縮んでしまったのかは私には分かりません。女性が私たちの関知しないなんらかの罪の償いをしているのでしょうか、それとも、私たち男性を驚かせようとして、全く新手のヘアスタイルにしているのでしょうか。あるいは、背の高い女性たち何名かが他の人たちより巧妙に立ち回って、自分たちの背の大きさを目立たせようとしてこの方法を編み出したのでしょうか。私の見た所、大半の人の考えは、彼女たちは現在ちょうど枝を下ろされたばかりの樹木と同じで、いずれ芽をだしはびこって、これまでよりももっと大きな頭になって登場するということです。真相はいまだもって謎です。私の考えはどうかといいますと、私より背の高い女性に馬鹿にされるのは嫌ですので、身長を伸ばし恐ろしく巨大な姿になっているときよりも、持って生まれた背丈になっている現在の控え目なヘアスタイルの方がはるかに気に入っています。私は本来の美しい殿堂に添え物をする、つまり、計画に基づいて土台の上に何か気紛れな建造物を建てることには反対です。従って、繰り返しになりますが、私は現在流行しているヘアスタイルを非常に喜ばしく思っている訳です。さらに、私はこのスタイルは現在女性の間に広く浸透しています良識の現れだと考えている次第です。女性はいつの時代でも頭部を飾り立てることにかけては、男性よりも大いに骨折ってきたと言えるかも知れません。実際、私は、リボンやレースや針金といった不思議な構築物を駆使する女性の建築家がそれぞれの創意で名前を記録に留めていないことに大層驚いています。この手の建造物では、大理石の建造物の場合と同様に、数多くの注文があったのは確かなことです。あるときにはピラミッド状に、またあるときにはタワー状に、そしてまたあるときには尖塔状にして欲しいとの注文があったはずなのです。ユヴェナリスの時代には、彼が面白おかしく述べているように、これは何層にもなっていたのです。

頭上にはつぎからつぎに何層にも積み上げられていた。前から見ると、アンドロマケーと見間違えるほどだった。後頭部はさほど高くなっていなく、どう見ても同一人物とは思えないほどだった。⁴⁾

ところで、私が書物から得た知識では、14世紀ほど途方もなく高くそびえたヘアスタイルになっていた時代は他にはありません。当時は頭の前部と後部がそれぞれ円錐状にとっても高くそびえており、髪飾りがなければビグミーとしか見えない女性が、髪飾りを着けるとまるで巨人のように見えたのです。ムッシュー・パラダンは「この旧式のフォンタンジュ（髪飾り）は高さが1エル（約1.14メートル）にもなった。先は尖塔のようにとがっており、その先端は長いクレープで

メアリの治世に大流行した。

3) 旧約聖書『民数記』第13章33節。

4) ユヴェナリス『諷刺』6.502-4.

結えられており、奇異な縁飾りが付いており、吹き流しのように垂れ下がっていた。」と語っています。⁵⁾

もしトマ・コネクトという名高い修道士⁶⁾が非常に熱心にかつ不屈の精神でもってこの髪飾りに攻撃を仕掛けていなかったら、おそらく女性はゴシック様式のこの建造物をさらに高くしていたことでしょう。この修道士は各地を回ってこの奇怪な髪飾りを非難したのです。彼の非難が好結果をもたらし、使徒の教えで本を焼き捨てた魔術を行っていた者たちと同様に、⁷⁾ 女性の多くが彼の説教の途中で髪飾りを投げ捨て、説教師の見ている前で焼いたのです。コネクトは彼の高潔な生活ぶりは言うまでもなく、説教の仕方が非常に評判を呼んでいましたので、しばしば会衆は2万人にもなりました。説教壇の一方には男性が、そしてもう一方には、(聡明な著者のたとえを借用すると) 天を衝かんばかりの頭にした杉の木立ちのような女性たちが陣取ったのです。彼はこの奇怪な頭飾りをやめるようにと非常に熱心に人々を説き伏せましたので、この髪飾りはまるで迫害を受けているかのようでした。この髪飾りが人前に登場するといつでも、野次馬たちから石を投げつけられました。ところが、この修道士が存命中はこの不可解なものは姿を消したのですが、彼が亡くなって数ヶ月するとまたぞろ顔をだし始めました。つまり、ムッシュー・パラダンの言を借りると、「おびえたカタツムリのように、角を隠していた女性たちは、危険が去るとすぐに再び角を出した」のでした。当時の女性たちの途方もない髪飾りについては、ここで引用した人だけでなく、その他の史家たちが取り上げています。例えばムッシュー・ダルジャントレも彼の『ブルターニュ史』⁸⁾の中でこれについて言及しています。

一般に、立派な統治が行なわれているときこそ、法外な権力を戒める法律を策定するのに適していると言われます。同様に、行き過ぎた髪飾りもまた、それが時代の好みに逆らっているときこそ、非常に効果的な攻撃を仕掛けることができます。従って、私はそれを予防するために本紙を女性の読者に強く勧めたいと考えます。

女性のみなさんは、すでに造物主の傑作である自分の身体に装飾的なものを何一つ付け加えることはできないのだということを十分に考えていただきたいと思います。頭部は人間の身体にあってもっとも高い位置を占めており、同時に、非常に美しい体裁となっているのです。造物主は顔を美しくしようとしてあらゆる技巧を凝らしているのです。造物主は顔に朱色と二列の象牙色を施し、微笑ませ紅潮させます。また、目の輝きによって顔は晴れ晴れとなり活気が添えられます。そしてまた、顔の両側には、精密な感覚器官がついており、得も言われない雰囲気と魅力

5) ギョーム・パラダン『ブルゴーニュの歴史』(1566年リヨン) 700-2 頁。

6) ブルターニュ生まれのカルメル会修道士。1434年、ローマにおいて教皇エウゲニウス4世によって異端者として火あぶりにされた。

7) 新約聖書『使徒行伝』第19章19節。

8) ベルトラン・ダルジャントレが1582年レンヌで出版した。パラダンとダルジャントレへの言及はベールから引いたもの。ベールはコネクトについて「彼は牧師の悪徳と、婦人の奢侈、特に頭飾りのために本人が小人にしか見えないほどの異常な高さの婦人の髪型を非難した。」と述べている。

を添えています。さらに周囲には流れるような髪の毛を配置し、とても心地よい趣きを与えています。要するに、造物主は実に見事な業を発揮して、円蓋のような頭部をデザインしたのだと思われます。従って、そこに余分の装飾をあれこれ施しますと、身体の釣合いを壊し、愚かにも注意を崇高かつ真の美しさからそらし、子供じみた、安ピカ物、リボン、象牙のモールといったものに向けることになってしまいます。

第99号 1711年6月23日（土曜日）

【アディソン】

何をもって善とし、何をもって悪とするか。(ホラティウス)¹⁾

しばしば私自身が会員であると明言してきましたクラブで、昨夜、人々の名誉ということが話題になり、全く目新しいと思える助言を色々伺うことができました。そこで、その時提出されたいくつかの意見を整理して、読者に本日の思索の材料を提供したいと考えます。ただし、読者から見て、もし本日の紙面に先週木曜日の内容と何かそごをきたしている点がある場合には、それはこのクラブの会員たちの意見であり、また、ファラモンというよりはむしろ私自身の個人的な考えだとお考え戴きたいと思います。

男性にとって最も重要な名誉に関わる点は勇気であり、女性のそれは貞節です。²⁾ 男性が決闘で面目をつぶした場合は、それは二度と回復することはできませんし、女性の名誉に一度つまずきがあった場合は、それは修復不可能です。名誉ということをこの二つの資質に結び付けて考える根拠は、ひとえに、男女それぞれが異性の目に最も好ましいと思える特質に最大の価値を置いているからでしょう。もし男性が女性の考えを無視して勝手にその特質を選択したなら、それは勇気ではなく知恵とか美德になるものと私は考えます。また、女性の場合は、おそらく貞節ではなく機知とか気立てのよさになるに違いありません。

男性にとって、勇気ほど女性から好ましく思われるものは他にはありません。女性は他人を怖がらせる人物が自分たちの足元に奴隷のようにひれ伏しているのを目にすると満足します。また、侮辱から身を守ったり争いの恨みを晴らしたりするときには、勇気が彼女たちの重要な弱点を補ってくれます。さらに、勇気は持って生まれた強く威勢がよいことのしるしなのです。一方、女性にとって、貞節ほど男性から重んじられるものは他にはありません。私たち男性は操の堅い女性を高く評価します。男性は、自分の愛する女性に、貞節とそれに付随する真実、忠実、節操が備わっていることをこの上なく大切にします。女性は何ものにもましてこのことで男性から慕われることになります。

1) ホラティウス『諷刺』1.6.63.

2) ラロシュフコー (1613-80) は『箴言集』第4巻第15節で「男性は勇気、女性は貞操が最高の徳である。なぜなら双方とも実践が非常に困難であるから。」と述べている。

私はウェストミンスター寺院に建立された故ニューカッスル公爵夫妻の記念碑の碑文を見て大いに満足しました。「夫人はコルチェスターのルーカス卿の末娘で、名前はマーガレット・ルーカス。ルーカス家は高貴な家系で、兄弟は全員勇壮で、姉妹は全員貞淑だった³⁾。」

騎士道に関する書物では、絶えず名誉ということが強要され、至る所に貞節と勇気の話が登場します。乙女は純潔のしるしに白馬に乗り、醜聞を避けるために、こびとを小姓にしなくてはなりません。彼女は何らかの不運によって彼女を救出する義侠の士が現れるまでは、男のひとのことを考えることはありません。騎士は恋に陥ります。そして彼女が感謝の気持からその救いの手を苦しめると、彼女に魅了されて、彼女の侮蔑的な態度に死ぬ思いをすることになります。でも、彼は乙女が屈服者のことを考えるようになるまで何年も寂しく過ごさなくてはなりません。騎士は立ち去り、遭遇する自分よりも大きく強いあらゆるものに挑みかかり、あらゆる機会を利用して勇気を試します。そして、7年間の放浪を終えて恋人の元に引き返します。その間、恋人の貞節は巨人や暴君から攻撃を仕掛けられ、騎士の武勇と同じくらい多くの試練に耐えていたのです。

今でもこの騎士物語的な気質の余波が強く残っているスペインでは、たとえそれが2階とか3階であっても、たまたま婦人が窓辺から恋人に目配せをすることは、我を忘れた愛情のしるしとなります。同時に、恋する男は血迷った男と決闘をして恋人への恋情を主張するのが通例となっています。

人をうそつき呼ばわりすることは体面を大きく傷つけることになります。娼婦を買っていると、酒飲みだとか、神を冒瀆しているとか言っても、憤慨されなくて済むかも知れませんが、うそつき呼ばわりすることは、たとえ冗談であっても、それは血で償わなくてはならない侮辱となります。おそらくその理由はうそをつくことが勇気がないことを示す最大の悪徳だからでしょう。そこで、うそつき呼ばわりすると名誉の最も過敏な部分にさわり、遠回しに臆病者と言われているのと同じ事になるのです。このテーマでは、私は古代ペルシア人について語っているヘロドトスをなおざりにする訳にはいきません。ヘロドトスによると、ペルシア人は息子に5歳から20歳までたった三つのこと、つまり、馬の扱い方と弓の使い方とうそをつかないことだけを教えるということです。⁴⁾

偽りの勇気を重んじることは徳も常識も備えていないまさに人間のくずに紳士として身を立てる機会を与えてしまいます。先だって亡くなった我が国のある貴族⁵⁾は、よくフランスの紳士にま

3) ウェストミンスター寺院の北袖廊にある。ニューカッスル公ウィリアム・キャベンディッシュは1677年に死亡し、二度目の妻マーガレット・ルーカスは夫より3年早く死亡していた。

4) ヘロドトス『歴史』第1巻第136章。

5) この人物は1707年8月18日に亡くなった初代デヴォンシャー公爵ウィリアム・キャベンディッシュだと言われている。彼は1669年大使としてパリに滞在中に、オペラ座で近衛兵3人から侮辱され、一人を殴り倒し、その後決闘となった。ホワイト・ケネット『キャベンディッシュ家回顧録』(1708)参照。

つわる面白い話をしていました。この紳士はパリである朝早く彼の元を訪問して、大層に敬意を表した後、自分は何なりとお力になると言うのでした。つまり、オペラから帰るときに閣下を押しつけた人物の名前を知っているという訳です。だが、その前にこの紳士は閣下にどうか自分を介添人にして欲しいと懇願するのです。あまりにも馬鹿げた事件に巻き込まれるのを避けるために、我が国の貴族は自分は友人二人の決闘に付き合わなくてはならないと彼に告げました。これを聞いたフランスの紳士は、自分自身は何の得にもならない事件に自分がこれ以上干渉しなくても悪く思わないで戴きたいと言って、そそくさと退出したということです。

フランス人のような独善的で陽気な人々の場合、名誉に関わる間違った考えを克服することは、当然のことながら、現国王の非常に優れた施策のひとつと見なされています。⁶⁾ 残念なことですが、このような災いをもたらす考えを罰するにはそこにある種の恥辱と汚名といったことが伴わざるを得ません。そのため、このような考えに献身的な人々は、名望を高めるのではなく、不面目と屈辱に繋がると考えるかも知れません。

死を見下すことを誇りにしている人を思いとどまらせるには、死だけでは十分ではありません。だが、決闘する人をことごとく笑い者にすれば、仮想紳士の数は素早く減少し、このあまりにも馬鹿げた慣習に終止符が打たれることでしょう。

名誉が美德を鼓舞し、神の法と国法に矛盾しない場合には、いくら大事にし助長してもし過ぎることはありません。しかし、名誉の命じることが信心と公正に反する場合には、これは誤った功名心を抱かせ、何が善で賞賛に足ることであるかをきちがえさせ、人間性を大きく墮落させることになります。従って、すべての国はこの悪習の誤りを暴き、人間社会を破滅させる元凶として、これを追放すべきなのです。

第100号 1711年6月25日(月曜日)

【スティール】

健康な人には愉快な友、大切なものが手に入る。(ホラティウス)¹⁾

年を取ってこれまでの人生を回顧するとき、不愉快な部分はすべて無視して、人生が満ち足りて楽しかったという人は、子供の頃にはそうでなくても、自分がとても若いことに気づくことでしょう。病気になったり、不機嫌であったり、怠惰であったりすると、いわゆる人生の大半は失

6) ルイ14世は親政後初的高等法院において決闘に関する布告を公布した。君臨している間に、さらに6回布告を公布し、その中で最も名高いものが1679年の「決闘に関する布告」だった。デフォーは、1704年4月29日の『レヴュー』で、「ルイ14世はどの国でも広く行き渡っていたとても根強い反道徳的行為、つまり、決闘を禁じた」と記している。サー・リチャード・グランディソンは決闘を禁ずるルイ14世の布告をルイ14世統治時代最大の誉れと評価した(リチャードソン『著作集』(1884)第9章318)。

1) ホラティウス『諷刺』1.5.44.

われてしまいます。従って、自分に忠実な人は誰でも、できることなら楽観的な気質を手に入れ、常に人生に満足するようにすべきです。そうしなければ、年齢が進むにつれて生きるということが窮屈になってしまいます。人よりも洗練された振りをする人には見せかけの細やかさといったものがよく伺えます。彼らは自身では真の喜びを目指さず、他人の偽りの喜びを観察することに注意を払います。こういった人たちは社会の虚弱者²⁾であり、人との交わりは、病人同然です。虚弱すぎて健康な人が行なう気分転換が出来ない場合は、自室に静かに閉じこもってはいなくてはなりません。サー・ロジャーの仲間の誰かが気分が悪いともらすと、彼は直ちにその人のためにミルク酒か何かを取りに行きます。そのため、絶えず代わりに他人の体のことを嘆いているこの種の人たちは、その場では想像できないほど元気のよい人となります。

不思議なことに、とても多くの人々が、馬鹿げているとも思わずに、どこそこが痛いといったことを話題にします。彼らはこれを自分に割り当てられた会話だと勝手に思い込んでいる訳です。これはとりもおさず最もつまらない会話なのです。最新ニュースを尋ねて、頭痛の話が返ってくると、一切何も考えられないし、自分を全く取るに足らぬ人物と考えてしまいます。人と顔を会わせるときはいつでも、お互いに上機嫌であるべきであり、友人が喜ばないと分かっている場合は、自分のことを話題に取り上げるべきではありません。しかし、実際には自分も相手も喜ばす方法を何一つ知らない人たちが大勢います。こういった人たちのことを私たちは普通無精な人と呼んでいます。思うに無精というものは喜びと苦痛の中間的な状態であり、乳母の手が離れた人生においては極めて似つかわしくないものです。努力を嫌がっていると、常に退屈な状態が続き、存在それ自体が重荷となります。無精な人は、本来備わっているはずの威厳をそこない、理性的な存在を単なる植物的つまり単調な存在にしてしまいます。このような人の人生は単なる身体の増進と老化に過ぎなくなります。そして、その他のことに関して理性の住まいにするくらいなら、無知であった方がましだと思えるようになってきます。

例の風変わりなハリー・ターセット夫妻の人生がこの人生に充当します。ハリーは独身時代には、思慮に欠けるが快活でいきの良い若者でした。そして、彼が結婚したレベッカ・クイックリー夫人は情熱的な若さと活発な素振りを見せる感じの良い女性でした。うわべの美点を備えたこの二人が結ばれ、情熱が冷め、それに代る理性も分別も備わっていない二人の生活は、今では、行き詰まっています。食事は味気なく、時間は退屈であり、財産には関心がなく、趣味がないために気晴らしが出来ません。こういった存在していない実例を挙げているのは、生きるためには常に愉快的仲間、つまり、バラの花冠³⁾を戴いた仲間と行動を共にすべきだと言いたいものではありません。そうではなくて、こういった喜びや無精や過剰な細やかさの対極にあるものを考えることによって、自分たち自身の中に見聞きするあらゆることにある種の楽しみを見出す気質を備えて

2) 第25号参照。

3) 第143号参照。

おく必要があるということを示したい訳です。

この軽便な上機嫌さを備えることによって、私たちは遭遇するあらゆる出来事に興味深く接することができ、人生を一瞬たりともおろそかすることはありません。非常に満足して過ごしますので、(かりに重荷とすればの話ですが)生涯最大の重荷でさえ意識しないうちに過ぎ去っていくことになります。ヴァリラス⁴⁾はこの種の気質を十二分に備えており、いついかなる所でも上機嫌です。落ち込んでいる人であれ、陽気な人であれ、厳格な人であれ、ふさいでいる人であれ、彼が姿を現すと、誰でも元気になります。同時に、ヴァリラスの言ったことを再現に値するような形で復元できる人は誰もいません。ヴァリラスは生来の善良さを備えていて、誰もが彼の存在を自分にとって心地よいと考えますので、彼はみんなから歓迎されます。彼は同席の人たちを楽しくさせるために何一つ貢献していないように見えますが、良く考えてみますと、彼の存在自体がそうさせるのだということが分かります。私は、紳士というものについて、ヴァリラスに機知が備わっているとすれば、この世で最高の機知だろうと思いました。確かに、心地よい気質に当を得た活発な想像力と育ちの良さが付け加えられますと、それは人生の喜びであることは言うまでもなく、最高の恵みと言えるのです。

楽しいことだけが期待できて、嫌なことは何も聞かされることが確かであれば、その交際には10倍の喜びがあるでしょう。人物評も悪意のない人が行ない、物事についても好ましく考える人が語ると分かっていますと、それは魅力的なものになるに違いありません。なぜなら、調理人には最高のものしか手に入らないからです。美しい絵画は、心の汚れていない人にとってはもてなしとなり、心の汚れた人にとってはうとましいものとなります。美点だけが飛び交う交わりを楽しむときには、それは天使の生活に近づいているのであって、悪いことしか飛び交わない場合は、悪魔の生活に近づいている訳です。

第101号 1711年6月26日(火曜日)

【アディソン】

古代の英雄たちは、忌むべき住まいで暮らすのだが、亡くなると聖餐を受け、神と崇められた。だが、彼らが人々と暮らしを共にし、大きな責任が与えられていたときには、このうえない善行を施し、町を建設し、法を制定し、非常に快適な生活をもたらし、道理をわきまえた粗野な人たちの教化につとめた。(ホラティウス)¹⁾

現代の頭脳明晰な著者によると、非難は一般大衆に支払う有名税だということです。²⁾ 著名人が非難を免れようとするのは愚かなことであり、その影響を受けるのは意志が弱いからなのです。

4) 『タトラー』紙第52号で、スティーラーはヴァリラスを真に憤り深い人物だと描写している。

1) ホラティウス『書簡詩』2.1.5-10.

2) スウィフト『雑感』(1706)。

古代においても、またいついかなる時代にあっても、傑出した人物は全員、この激しい迫害を経験して来ました。非難に対しては防ぎようがなく、そのまま曖昧にしておくしか手だてはありません。ちょうど諷刺と罵倒がローマの凱旋式に欠かせなかったように、非難は高名に付随する一種の付き物なのです。

著名人は一方で非難にさらされとすると、他方では同じだけへつらわれます。理不尽な非難を受けるとすると、同様に受けるに値しない賞賛も浴びます。要するに、高名な人は中立的な目で見られることとはなく、常に味方か敵かという見方をされるのです。このため、高名な人の真実の性格が明らかになるのは、往々にして死後数年してからのことになります。個人的な友情関係や敵対関係および彼らが関係している集まりは、欠陥や美徳が公平な評価を受けないうちに、終止符を打たなくてはなりません。著者に真実を知る機会がごくわずかであれば、真実は著者の意のままとなります。

従って、傑出した人物の性格を調整し、高名をめぐる対抗心からあらゆる人たちを分裂させて徒党を組ませた敵対者間の事態を正すのは、後世の人たちに与えられた特権です。私たちは今、ポンペイウスをけなさなくても、カエサルは偉大だったと認めることができるし、カエサルの美徳をけなさなくても、小カトーの美徳をたたえることができます。生存中は味方は気前が良すぎ、敵方は寛大すぎたのですが、亡くなって久しい人は誰もがそれ相当の賞賛を受けています。

サー・アイザック・ニュートンの計算では、1680年に観測された彗星は太陽に接近して夥しい熱を吸収したため、もしその彗星が鉄球だったとすれば、赤熱の鉄の2千倍の熱を帯びており、地球と同じ大きさで、太陽からの距離も地球と同じだと仮定すると、冷めて元の状態に戻るのに5万年かかるということです。³⁾ 同様に、もし現在陥っている政界の騒擾状態、至る所で強い熱を帯びている様子を考えれば、これが冷めて元の状態に戻るにはゆうに300年はかかると考えざるを得ません。300年経過すれば、おそらく現在の熱気は消え、偉人はそれぞれそれ相当の評価を受けるかも知れません。その頃になればおそらく、同時代の情熱と偏見でもってタキトゥスの言う「最近の忌むべき人物」⁴⁾ について書くのではなく、現在の偉人について公平な評価を下す著名な史家が登場するかも知れません。

私はしばしば、今からイギリス史の最も輝かしい時代を取り上げるといった序文を付してアン女王の御代について記述する300年後の仮想の史家のことを想像します。その頃になれば、評判を

3) ニュートンは『プリンキピア』(1687)で、彗星の核が固体であることを証明するために、この箇所のようなことを語っている。「1680年の彗星は太陽の直径の6分の1の距離まで太陽に接近した。彗星は地球上での太陽熱の2万8千倍の熱にさらされたに違いない。従って、赤熱の鉄の2千倍の熱を帯びたと言える。そこで、それだけの強烈な熱を含んでも蒸気として消散しないとすれば、その物質は必然的に固体であるに違いない。」(ヘンリ・ベンバートン『サー・アイザック・ニュートンの哲学』(1728)236頁)。アディソンも1680年の彗星について「大砲の弾より速く、長さ8千万マイルに及ぶ炎の尾を引いた」と言っている(『ガーディアン』第103号)。

4) タキトゥス『年代記』1.1.

競った好敵手たちは、それぞれの長所に従って識別され、それ相応の光をあてられて異彩を放つことでしょう。この史家によると、A氏は当時の著者によると描写は食い違っているが、能力、勤勉、高潔さにおいては並外れていたように思える、そしてまたA氏とは党派と利害関係を異にしていたが、B氏もまたこれらの点においてA氏に何一つ劣ってはいなかった、ということになります。現在は互いに軽視しようとしており、党派の違いによって称えられたりそしられたりしている敵対者たちは、その頃になれば、一様に称賛され、イギリス全国民から傑出した人物とみなされることでしょう。現在では人々の評価が二分している功績のある人物は、その頃になれば、すべての人たちから認められ、称賛されることでしょう。

私の言っている将来の史家は、この輝かしい時代で活躍する人物を取り上げるとき、現在我が国で異彩を放っている非凡な才能と学識を備えた人物を取り上げるのは間違いありません。私自身のことを申し上げますと、私はしばしば心ひそかに、その頃になると、称賛されるに違いないと思っています。そこで、私が思いますに、この仮想の史家のいずれかのページの内容とまんざら似ていないとも思われない一文を作成してみました。

スペクテイター氏が日刊で現在も残っている例の小論を発行したのはこの時代のことだった、とこの史家は述べます。著者については、顔が極端に短く、極度に寡黙であり、ただひたすらピラミッドの寸法を知りたいということでグランド・カイロまで旅をするといった知識をこよなく愛する人物であったということ以外には、名前も人柄もほとんど分かっていない。彼の主だった友人としては、風変わりな郷士のサー・ロジャー・ド・カヴァリと、名前は明らかにされていないテンブル法学院の弁護士がいた。彼はある寡婦の家に下宿し、大層ユーモアに富んだ人物だった。彼の風采や性格について確言できるのは以上ですべてである。彼の思索に関しては、その当時の古臭い語彙や曖昧な言い回しが散見できるが、当時のイギリスの人たちの気晴らしや性格は十分に読み取れる。多くの点でおそらくこじつけているのだろうが、著者の陽気さとユーモアを大目に見ることとする。というのは、もし彼の言葉を文字通りに解釈するなら、上流社会のご婦人方は午前中はずっと人形芝居をみて過ごすのが常だったし、つけばくろが主義主張の証しとなったし、劇の観客は理解できない言語で書かれた芝居を観ながら一夜を過ごしたのだし、椅子や植木鉢がイギリスの舞台では役者としてデビューするのだし、宮廷では真夜中に男女入り乱れて仮面を着けて集まりをもつ等々本当とも思えないようなことが色々あったのだと考えざるを得ないからだ。従って、私たちとしては以上のような様々な事柄で著者がそれとなく遠回しに言いたかった点は、当時流行していた現代の私たちには理解できない愚行だったのだと考えざるを得ない。この思索のいくつかの文章から、著者の仕事をけなそうとする人たちが何名かいたと推測できるが、これに関しては何一つはっきり述べられていないので、彼の新聞に対する異論はなかったものと考えられる。もし私たちが我が国のいにしえの著述家に対する寛大な気持で彼の文体に注目すれば、あるいは、様々な批判的論述や倫理的自省を展開しながら彼が扱う多様なテーマに注目すれば、……

.....。

残りの箇所は私にとって好都合なことばかりであり、その通りだと主張するのはおこがまします。この掲載はどうかご勘弁戴きたいと思います。

第102号 1711年6月27日（水曜日）

【アディソン】

頭の回転を良くするために、時には気晴らしをした方が良い。(フェイドロス)¹⁾

つぎに掲げる手紙はあだっばい女への諷刺と言うべきか風変わりな特技の見本と言うべきか、どんな表題をつけたらよいのか私には分かりません。そこでこの手紙はそのままみなさんにお伝えすることとします。手紙を呈示するだけで意図することは十分にお分かり戴けると思います。そこで、私は前書きも後書きもつけずに、詳細にお知らせいたします。

観察者殿

男性が剣で武装しますように、女性は扇で武装します。そして、時折、この武器は威力を十二分に発揮します。そこで、婦人が身に着けるこの武器の完全な遣い手になるために、私は現在宮廷で実践されています最新の所作による「扇の使い方」を若い婦人に教授する学園を設立しております。私に師事する婦人は一日に二度扇を手にして我が家の大広間に整列します。そして彼女たちは武器の使い方の指導を受け、つぎの号令のもとに練習を積みます。「扇を手にしなさい」「扇を広げなさい」「扇を発射しなさい」「扇を置きなさい」「扇を戻しなさい」「扇をはためかせなさい」。この限られた単純な号令を厳守しながらわずか1年半忍耐強く練習熱心に取り組むと、この当世風のからくりを魅力的に取り扱うことができるようになります。²⁾

みなさんにこの稽古に関して正確な知識を持って戴きますために、ひとつひとつ具体的に説明したいと思います。我が婦人連隊が各人武器を手にして整列しますと、「扇を手にしなさい」と私の号令によって、全員私に向かって扇を振ります。そしてつぎに各人はそれぞれ右手の婦人の肩をポンとたたき、扇の先端を口元にもっていきます。それからその武器をゆっくり下げ、つぎの号令を待ちます。以上の動きはすべて扇を閉じたまま行い、普通、1週間で修得します。

つぎは「扇を広げる」所作となります。これには時間をかけてゆっくり開閉する動きとともに、ひらひらとさせたりゆらゆらとさせたりする動きもいくつか入ります。これを修得するには1ヶ月では少し時間が足りません。この稽古ほど見物人を喜ばせるものはありません。なぜなら、突如として、連隊の各人が手にしているキューピッドや花輪や祭壇や鳥や動物や虹やその他快い図

1) フェイドロス『寓話』3.14.12-13.

2) 1712年1月5日の『プロテスタント・ポストボーイ』に「目の訓練」と称する小冊子の広告が掲載されたが、これと同じ調子で書かれている。

案が無数に名乗りを上げるからです。

私が「扇を発射しなさい」と号令しますと、順風が吹けばかなり遠方にまで届くピシッという鋭い音が一斉に発せられます。この稽古が最も難しいものですが、入学当初には部屋の隅まで届くようなポンという音を発することが出来なかった婦人が、今では何名も小型ピストルのような音を出せるようになっていました。私はまた、(若い婦人が扇を発射させる場所や時を間違えないように) いつどこで発射すればよいかを教えるように留意しています。おまけに、私は16歳の娘さんがほんのかすかな風の助けを借りれば、通常の扇を手に行っている50歳の婦人と同じほどの音を発することができる扇を考案しました。

以上、扇の発射が順調に終わると、つぎの号令は「扇を置きなさい」になります。これはカードを手にしたたり、巻毛を整えたり、落ちたピンを拾ったり、その他大切なことするために扇を手放すときにどうしたら奥ゆかしい所作になるかを教授します。この稽古は、(扇を載せるために脇に置いてある) 長テーブル上に気取ってポンと放り投げるだけでも、2日で修得できる人もいれば、1年かかる人もいます。

連隊がこのようにして武装解除されると、私は普通各人に部屋をしばらく歩き回らせませす。そして不意に「扇を戻しなさい」という私の号令を耳にすると、全員(まるで長居をして時計に目をやる婦人のように) 急いで武器の置いてある場所に行き、それを手にし、きちんと居住まいを正します。この稽古は、扇のことに専念していれば、難しいことはありません。

最後は「扇をはためかせる」所作となります。確かに、これは一連の稽古の集大成となりますが、時間の浪費さえなければ、3ヶ月でマスターすることが出来ます。通常、夏の蒸し暑い時期や暑い盛りは、この稽古は避けます。というのは、私が「扇をはためかせなさい」と号令を発するやいなや、夏にとてすがすがしいそよ風が一斉にその場に充満し、きゃしゃな体質の女性にとっては体に良くないからです。

「扇をはためかせる」方法については、動きは限りなくあります。怒ったもの、慎み深いもの、臆病なもの、狼狽したもの、陽気なもの、そしてなまめかしいものなどがそうです。興味深いことに、どんな感情でもほとんどすべて、扇にそれに相応しい動きとなってあらわれます。私は訓練の行き届いた婦人の扇を見るだけで、その人が笑っているか、不機嫌であるか、恥じているかが分かります。私はかつて、怒りを誘発した恋人がその場にいたら物騒なことになっていたと思えるほど腹を立てている扇を見かけたことがあります。またあるときには、婦人のことを考えると、恋人が同席していないのを喜ばしく思うほど生気のない扇を見かけました。言うまでもなく、扇はその持ち主の人間性次第で淑女ぶる女にもあだつばい女にもなります。この手紙を終えるにあたりまして、私の生徒用に『扇の熱情』という独自の小論文集を編集しているとお知らせしておかなくてはなりません。貴方が世間の人々にもこれは有益だとお考えのようですと、貴方の元にお届け致します。つぎの木曜日には総覧会を開催します。貴方のご臨席を賜れば幸いです。

敬具

追伸：若い殿方には洒落た扇の使い方を教授します。

注：無駄を省くために、小型の簡素な扇をいくつか考案しました。

第103号 1711年6月28日（木曜日）

【スティール】

誰でも同じ事をしたいと考えますが、させてみればいいのです。

そして、いたずらに汗をかかせなさい。労苦は徒勞に終わり、

結実することはないのです。（ホラティウス）¹⁾

慇懃な言葉で遇されてきた私の友人の聖職者は、(彼が思うにこれは生身の人間に用いるには相応しくなく、私が思うに彼にしか、しかも彼のいない所でしか当てはまらないのだが)、私たちの間に伺える過度の丁寧な喋り方に立腹し、クラブでその反論を展開しました。そしてクラブではクラブ発会以来一度も誉め言葉を聞いたことはないと言ってその話を終えました。全員彼の結論に満足し、各人は彼の好意が分かっていますので、常日頃私たちが経験する公言される多くの親切やもてなしは、その気になっている所では不自然なものであり、言葉通りの意味ではなく、一部しか意味しない言葉の悪用だということを確信しました。我が聖職者殿はこの件で、亡くなった大主教の遺作第1巻の説教から最初の部分二、三節を指摘しました。²⁾ 私はこれまでにこれほど満足のいくものを読んだ記憶はありません。これはそれに相応しい形で崇高について語るロンギノス賛美となっているように、³⁾ この著者は誠実さについて、華麗な言葉づかいを忌み嫌い、説教者として同時に手本として、単純明快に論じていると言えます。彼は意のままに職業的な言い回しと気概を込めて、ほんのわずかな恣意的な表現と思いやりを込めるだけでこの上なく生き生きとした機知や諷刺となる過ちを指摘しています。彼は好意を寄せて、つぎのように機知を懲らしめました。

「今日伺える腐敗や墮落の顕著な事例は色々ありますが、全般的に、また顕著に、人の交わりにおいて誠実さが欠けている点はどうしても無視することは出来ません。世間には偽善と愛想が充満しており、言葉がそのままその人の考えを表していることはほとんどありません。もし誰かが熟慮の上で発言し、思った通りのことを口にし、他の人たちほど思いやりを示さなければ、その人はほぼ確実に作法がなっていないとの非難を受けます。かつての我が国に浸透していた率直さと誠実さ、清廉潔白さ、そして常に心の気高さを示し、揺るぎない勇気と不屈の精神を生み出す正直さは、すっかり影を潜めているのです。異国の作法や流行を押し付け、卑屈にもよりによってお粗末な隣国の模倣をするようになって久しくなります。今日では会話での言葉づかいに

1) ホラティウス『詩の技法』240-2.

2) 大主教ティロットソンが1694年7月29日にキングストンで行なった最後の説教。

3) ボワローによるロンギノスの翻訳序文参照。

は虚飾と愛想が充満しており、(私に言わせますと)親切と敬意の表現をうんざりするほど聞かされますので、もし一昔あるいは二昔前の人々が現代に蘇り、自分の国の言葉を理解し、飛び交っている言葉の本来の意味を知ろうとすると、確実に辞書が必要となるでしょう。そして最初は、考えられる限りの親切な態度を示す表現が、一般に現在の支払いでは非常に安価で出回っていることがほとんど分からないでしょう。実際にそのことが分かっても、落ち着き払って安らかな気持で人々と対等にまたそれなりに交わることが出来るようになるには随分時間がかかることでしょう。

実は、ほぼ常に飛び交っている敬意と親切の厳粛な表現を耳にして軽蔑すべきか憐れむべきかは決めがたいのです。また、人々がおそらくはこれまでに面識のない人にどれだけの敬意を表すかは分りにくいし、理由もなく突如としてその人のためにどれだけ献身的になるかも分かりません。そしてまた、人々が何の恩恵もないのにどれだけ限りなく変わらない好意をその人に寄せるのか、何のいわれもないのにその人のことを心にかけ、また悩むのかは分かりません。この種のうわべだけの会話を正当化するとき、愛想は無害であり決して人をだましているのではないと言われているのは分かっています。だが、私たちがお互いに理解しあえば、それで十分なのです。「言葉は金銭に似ている」のです。⁴⁾ その価値が一般に理解されておれば、誰もだまされなくて済みます。ある言葉が何らかの意味を持てば、それは大切ですが、言ってみると言葉は暗号に過ぎません。とはいえ、誠実さと率直さがすたれ、我が国の言葉がうそになってしまっているのはやはり嘆かわしいことです。人々は言葉をゆがめ、言葉に価値がなくなってしまうしました。会話の大部分は単なる偽善の取引に過ぎなくなっているのです。人々はわずかに残っている誠実さを見かけると、心底気分を悪くし世の中がうとましくなってしまうほどなのです。」

私の友人の聖職者はこの悪習をやり玉にあげるとき、非常に気取りのない言葉と考えを駆使してあますところなく反論を主張しますので、これを読んだ人は誰でも彼自身がこれを書いたのではないかと考えるのでした。

「私は誠実ほど有益なものはないと確信しています。なぜなら、その振りをすることが立派なことだと考える以外は、そうでないと白を切ったり見せかけたりする必要はどこにもないからです。偽り白を切ることは、うわべだけの優秀さを装うことになります。ところで、世間からひとかどの人物に思われようとする最善の方法は、実際に自分がそうなることです。その上、立派な人物の振りをし続けることは、立派な人物になるそのことよりも何倍も厄介なことなのです。もし立派な人物でなければ、そうでないことが暴露するのは確実です。そしてその振りをして来た労苦はすべて徒労に終わってしまいます。」

聖職者はこの話の別の箇所でも、さらに、どんな手練手管も必ずそれを企てる人物を落胆させることになると言います。

4) ホップズ『リバイアサン』1.4 参照。

「うそや偽善はどれほど都合がよいと思っていなくても、直ぐにそうでなくなってしまう。一方、そのことでこうむった迷惑はいつまでも続きます。なぜなら、永久に妬みと疑いの目で見られることになるからです。その結果、本当のことを言っても信じてもらえませんが、またおそらく正直に打ち明けても信用されません。一度正直であるという評判を失ってしまうと、その評判はくつがえることはありません。そうすると、真実もうそも何一つ意味がなくなってしまうのです。」

第104号 1711年6月29日（金曜日）

【スティール】

ハーパリスは盛装してトラキアの軍馬にまたがった。(ウェルギリウス)¹⁾

礼儀正しき、つまり、礼儀作法という人生の規則に違反するようなことが何も起こらなければ、それは気高い進歩といういわゆる立派なしつけを取り戻したことになるでしょう。これは人々の敬意を集めることになります。なぜなら、礼儀作法には、優れた意見には敬意を払うということが含まれているからです。立派な人物に宿る謙虚さは、常に、傲慢な人物がどんな手管を駆使しても決して手に入れることが出来ないある種の尊敬の念が伴います。美德と礼儀作法は密接な関係があり、両者の分離は頭の中では可能だが、実際には切り離すことは難しい、とキケロは語っています。²⁾ 身体の美には常に身体の健康が伴うように、確かに礼儀作法には美德が付き物なのです。快い身のこなしを伴った身体の美が目を喜ばせ、その喜びが互いに均斉のとれた優雅な身体全体から生まれるように、上品な振る舞いもまた、その秩序正しく、節操を守った、穏健な言動が交わる人たち全員から称賛されます。これは立派な人物に対する敬意から世間全般にまで及びます。自分が他人にどう思われているかに無頓着である人物は、尊大であるだけでなく破廉恥でもある、³⁾ ということになります。以上のことから徳の違いを識別することが出来ます。暴力を振るわないことが正義の一要素であるように、無作法なことをしないことは慎ましきのひとつなのです。この点にいわゆる礼儀作法の要点のすべてが宿っています。上述のかの優れたモラリストはこの観点から礼儀作法について語ります。しかし、この資質は、彼が雄弁に語っていますが、凡人でももっと簡単に理解できます。この上品な振る舞いは概してすべての階級の人々から無視されます。それだけでなく、いわば飾りとして造られている女性自身がしばしば人生の装飾ということをしてひどく誤解しています。私には、もし若い婦人すべてが衣服や言動において、姉妹、娘あるいは妻として身を委ね、そこでより高い評価を得ようとするだけであるなら、それは振る

1) ウェルギリウス『アイネーイス』1.316-17.

2) キケロ『義務について』1.27.94. スティールはこの文を第259号の標語とした。

3) ボナミ・ドブレー教授がアディソン研究の冒頭に引いているこの文は、スティールが『義務について』1.28.99. から引用したもの。

舞いの規則としては不十分に思えます。女性にとって、他家との縁組みを求められることが、家族のことを配慮をしながら自身のことに気を配る場合の最大の動機となります。この目標を達成するには、礼儀作法を厳格に守ることが一番の近道です。このテーマについては、夕暮れ時に街はずれで見かける乗馬をする階級に属す婦人に、真剣に考えてもらいたいと思います。つぎに掲げる手紙は少なくとも一読に値するものと思われます。

拝啓

空の静けさ、生き生きとした野原のいろどり、そして周囲の風景の変化をめぐる私は、先だっ
てこの季節ならではの美しい夕暮れ時に散歩に出掛けましたが、突然、通りかかった騎乗の人た
ちの一団のせいで自然への私の注意がそらされてしまいました。私は他の人たちのことはほとん
ど目にとまらないほど、一団の中ほどに位置し、中世騎士物語にでも登場するような服装をした
美青年に釘付けになりました。彼の目鼻立ち、顔色、衣服は実に女々しく、素振りにはある種物
憂げな虚飾が漂っていました。入念にカールされ、髪粉がふられた髪の毛は長さが肩までありま
した。そして、その髪の毛は、まるで恋人の手によるかのように、気まぐれに緋色のリボンで結
わえられ、吹き流しのように背後になびいていました。縁飾りと刺繍が銀のブルーのキャムレッ
トのコートとチョッキを羽織り、⁴⁾ 繊細なレースのスカーフを着け、縁が粹にぴんと立った銀の縁
取りで羽飾りを一本つけてさらに格好をつけたビーバーの帽子をかぶっていました。ペースメー
カーの彼の馬もまた、同様に優雅に飾り立てられており、乗り手の虚飾を共有しているようでし
た。ひとえに見られることだけを目標にして教育されたと思えるこの若者の奢侈に同情を寄せて
いたとき、さらに近づいて目を下に向けてみると、それまで目に入っていなかったのだが、彼が
コートやチョッキとお揃いのペティコートを身につけていることに気づきました。この発見をし
て、これまで私をだましていた美しいアマゾンの顔に再度目を転じました。そして、これまで女々
しさに不快感を覚えさせられていた容貌が、今度は無作法な大胆さではないか思えて来ました。
彼女の目や鼻や口元は申し分なく均斉が取れているようですが、見かけはとても端麗な若者であ
る彼女が実際には無頓着な女性であるかどうか、私には確信が持てません。

当然、このようにたまたま服装が入り乱れていること、そしてそのことが男女それぞれの美を
保っている礼儀正しくかつそれぞれの違いを示す容姿を乱しているのではないかということに対
しては異論があります。だが、現在の状態よりももっと頻繁にこのようなことが起これば、それ
は全員を仮装舞踏会に参加させているようなことになります。婦人がこういったアマゾンの一
人な狩猟用服装をすることになったお手本は、私の理解するところでは、最初はフランスから輸入
されたのです。そして、これは何事につけあつかましく行なうように教え込まれている彼の国の

4) キャムレットとは元々は高価な東洋の織物につけられた名称。後にはその代用品もキャムレットと
呼ぶようになった。羊毛、絹、毛、綿、亜麻糸などを織り合わせた、いわゆる「ラクダ織り」のこ
と。

放埒な国民性をよく表しています。だが、我が国の慎み深さに照らしてみると、これはなんともおさまりが悪いのです。慎み深さにとって、ペティコートは一種の厄介者です。もしアマゾンたちがこれから男性の装身具を略奪することが相応しいと考えるのであれば、乗馬用半ズボンも着用して戦利品を増やし、男性に対する彼女たちの勝利を完結させるべきです。

私たち男性がまねる作法を無頓着に身につけることが当然なことだとすると、喜んで男性の服装を強奪している婦人たちは、自分たちを犠牲にして、私たち男性に身に余る敬意を表することでしょう。敬愛すべきカミーラが本来の姿とは違った格好をして私たちを欺き、銃を手にし、スパニエル犬を従えて気取って絵のポーズを取ったり、名家の相続人である彼女の兄が妹と同じ絹の服を着て絵に登場するなんてことは想像できません。服装と雰囲気は表裏一体であり、ある雰囲気に満足できない人は、その雰囲気を醸し出す服装を身につけようとしてはなりません。我が国の女性には生まれながらにして好ましい点が色々備わっていますので、とっぴな衣服を着用すると、それを身につける人に考案者と同じ必要性がない場合には、だまされたように見えます。女性に強く望みたいことは、本来の自分、すなわち造物主に与えられたそのままの自分を見失わないことです。女性が本来の姿からはみ出した場合の過ちを分からせるためには、柔和で女々しい女性の格好をしている男性を見せてあげればよいのです。そうすれば、女性が男性の格好をすれば私たち男性にとってどんな姿に映るかが分かります。

敬具

第105号 1711年6月30日（土曜日）

【アディソン】

何事につけ耽溺し過ぎないことが人生の鉄則だ、と私は考えている。(テレンティウス)¹⁾

私の友人のウィル・ハニコームはいわゆる人間理解を大いに誇りにしています。そのために、彼は若い頃色々大きな失敗をしました。ウィルは彼の出会った女性との不幸や男性との衝突ひとつひとつを自分の成長の糧とみなします。そして、若い頃に、窓ガラスを割ったり、巡査を殴り倒したり、誠実な人の寝込みを襲ったり、淫らな女性の部屋に不意打ちをかけたりしなかったら、現在の自分はなかっただろうと考えています。²⁾ ウィルはこの種の冒険をすることを人生勉強と称し、道楽に通じることが世間を知ることだと言います。彼はこれまでの半生は夜通し人々の気持を読んでいたために毎朝頭痛がしていたし、今は時々覚える痛みはその苦勞がなかったら、この時代の色事には無縁であったと考えて自らを慰めているのだと率直に打ち明けます。ウィルはこれを紳士が習得しておくべきものと考え、その他あらゆる知識もまた、彼の言う学者、本好き

1) テレンティウス『アンドロスの女』60-61.

2) 王政復古期の放蕩者の典型的な行動パターン。

の人、哲学者の心得とみなしています。

こういったことから、色々な人が集まったところではウィルが異彩を放ちます。彼には理解の及ばないものはなく、実際に無知であってももっともらしくしてしまう方法を知っています。しかしながら、私たちのクラブでは、しばしば彼の揚げ足を取ります。そんなときには、みんな彼を容赦しません。ウィルは始終私たちが道楽のことは知らないといって馬鹿にしますので、私たちは時々書物の知識を披瀝して、彼にしっぺ返しをするのです。

先週、彼は若い頃にあだっぽい女に向けて送った手紙を二、三通持ち出しました。ひやかしているその手紙の内容は迫真的であり、生っ粋の道楽者が書いたものとしては十分でしたが、とても不運なことに、単語のつづりが何箇所か間違っていました。最初、ウィルは精一杯笑い飛ばしていましたが、みんなから、特にテンプル法学院の弁護士から攻撃されているのだと分かったと、少し腹を立てて、自分はつづりのことで学者ぶるのは嫌いだ、自分は学者ではなく紳士のつづり方をしたのだと言いました。このとき、ウィルは例の銜学者³⁾に見られる狭量さと自尊心と無知という話題を引合いに出しました。彼がこれをあまりにも力説しましたので、私は下宿に引き返したとき、銜学者ということで心に浮かんだ考えをまとめてみたくなりました。

書物に囲まれて育ち、書物以外のことは何も喋れない人物は、交際には極めて無関心で、いわゆる銜学者といえます。しかし、この肩書は拡大解釈して、自分の職業および特定の生き方しか知らないすべての人々に当てはめるべきだと思われます。

生っ粋の道楽者ほど際立った銜学者は他にはいません。道楽者は劇場や当代随一の美人たちや社交界の騒ぎに関する話題が禁止されると、口がきけなくなってしまいます。粋な紳士の知識はほぼすべて宮廷内のことに限られます。こういった紳士は主だった寵臣の名前を挙げたり、貴顕の士の如才ない言い回しを復唱したり、まだ噂に上っていない不義についてさきやいたりします。また、その人の守備範囲がもう少し広い場合には、おそらく、オンバーというカードゲームのことをあれこれ話題にするでしょう。⁴⁾ こうして社交上のたしなみをすべて出し切ってしまうと、話題は枯渇して、それ以上の会話は成り立たなくなります。こういった人物は鼻持ちならない銜学者以外の何者でもありません。だが、彼らは大学の銜学から免除されていることをとても自慢しています。

つぎに軍人の銜学者を挙げることができます。この人物は常に野営地で話をし、年がら年中、

3) スティールは『タトラー』紙第244号で「銜学は多量の読書はするが理解しないために起こる。学識と分別を備えた人たちに囲まれた銜学者は、洗練された会話に受け答えする無知な召使のような存在である。その場に居合わせなければ、頭には可能な限りの知識を詰め込んでいると思えるのだが、目の前にいなければいけないで、どう考えても賢明だとは思えない人物のこと」だとの結論を下している。銜学についてはマルブランシュ(1638-1715)『真理の探究』第2巻第5章(1700)参照。

4) このゲームは17世紀から18世紀にヨーロッパで流行した3人で行なうカードゲームでナンバーとも言う。ジョージ・ティロットソンの編集したポープの『毛髪掠奪』(メッシュウエン、1940)付録Cにこのゲームの歴史やルールが掲載されている。

町を襲い、占拠し、戦闘を繰り返しています。彼の口にすることはすべて火薬の匂いがします。武器を取り上げると、彼は自分では一言も発することは出来ません。同様に、法の銜学者を挙げることができます。この人物は年中判例を引き、ウェストミンスター・ホール的话题を繰り返し、どうでもよい事柄で論争を仕掛けます。立場の違いやありふれた事柄は無視して、あくまで論証に力点を置きます。国事の銜学者は情報に包まれており、政治に没頭しています。スペインあるいはポーランドの王に関する話題になりますと、実に能弁になりますが、話題がガゼット紙から外れますと、黙ってしまいます。要するに、廷臣であれ、軍人であれ、学者であれ、単純にそれだけの人物は無味乾燥な銜学者に過ぎず、滑稽な存在でもあるのです。

私に取り上げるあらゆる銜学者の中で、一番我慢できるのは書物の銜学者です。この人物は混乱しているとはいえ、少なくとも知識がぎっしり詰まった頭、つまり、悟性が働いていますので、彼と交わる人物はしばしば、当の本人には何の役にも立たないのですが、知っていれば価値のあること、つまり、おそらくは有効に利用できる知識を彼から吸収することができるのです。博識者の中で最悪の銜学者は、当然、常識に欠けており、分別を持たず、手当たり次第に大量の書物を乱読している人物です。

実は、知識というものは、旅行やその他の自己向上のための手段と同様に、良識に磨きをかけるものですが、一方で、愚かな人が知識を身につけた場合は、その人は一層生意気になり、愚かさも募り、ますます耐え難い存在となってしまいます。

皮相な銜学者は手堅く有益な知識を身につけた人物よりもはるかにお互いを誉め立てます。彼らが校訂者、校合者につける肩書を見れば、英連邦における著述家の誉れ、時代の驚異と見まがうばかりです。調べてみますと、おそらく彼はギリシャ語の小辞を訂正したに過ぎないか句読点をきちんと打ち直したに過ぎないのです。

実際、彼らはお互いの顔を立てるために、このように気前よく褒め称えざるを得ないのです。夥しい知識を身につけても思慮分別が育まれなかった場合は、その知識は当然のようにして独善的で傲慢な人物を作ってしまうのは理の当然なのです。